

とらうべ

人生は夢

蒲島郁夫

東京大学法学部教授

人の一生には思いもかけないことが起こる。高校時代は落ちこぼれだった私が、東大法学部の教授に就任したこともその一例だろう。

私は10人兄弟の8番目で、家族は戦後、旧満州国から引揚げてきた。父親は、私が高校2年生のときに亡くなるまで定職がなく、ずいぶんと貧しい生活だった。大学に進学するというチョイスはなかったの、学校にはあまり行かず、終日、麦畑やレンゲ畑で寝ころんで、本を読んだり、空想に耽ったりしていた。

高校を卒業すると地元の農協に就職した。だがそのころ、阿蘇の大平原で牧場を経営することを夢見て、2年で農協を辞め、派米農業研修生としてアメリカに渡った。

アメリカではアイダホ州の農場に入り、数百頭の肉牛や羊を飼育した。研修生といっても農場主からみれば安い労働力に過ぎず、慣れない農作業で本当に苦しい目にあった。後に苦学生生活を送ることになるが、この時の苦しみを思えば何ということもなかった。

学問の面白さに初めて触れたのは、その研修プログラムの一環として、ネブラスカ大学農学部で3か月の学科研修を受けたときである。その時ほど、大学に進学したいと真剣に思ったことはない。今度は大学進学を夢見て、一旦帰国後、6か月間牛乳配達をして渡航費を貯め、50ドルを持って再度アメリカに渡った。そして、正式にネブラスカ大学農学部に入學したのは24歳の時である。

大学に入るのは遅かったが、結婚は早かった。妻は同じ熊本出身である。大学1年生のときに結婚し、大学院を終えるときには娘が3人いた。最初の娘のときは分娩室で出産に立ち会って、彼女がまるでキューピーさんのような顔をしてこの世に生まれてきた瞬間を鮮明に覚えている。

アメリカでは出産のための入院期間は2～4日ととても短い、待遇はとてもよい。食事のときにレストランのようにメニューから好きな食事を

選んだり、食後のワインがついていたりする。貧乏な学生生活を送っていたので、そのことがとても贅沢に思え、妻を幸せな気分にした。夜は、病院のヘルパーの人が妻の体をマッサージしてくれたり、見舞いに来ている私のぶんまで夜食を持ってくれたりした。

ネブラスカ大学では、繁殖生理学を専攻し、豚の精子の長期保存の研究に取り組んだ。成績も悪くなかったの、卒業するとき指導教授から畜産学の大学院に進むよう誘われたが、その道を選ばず、ハーバード大学の大学院に入学した。昔から勉強したかった政治学を勉強するためである。学部で一度も政治学を履修したこともなく、妻と子どもが2人もいる留学生を、奨学金付きで博士課程に迎えてくれたハーバード大学の決断には今でも深く感謝している。

ところで、この欄を読むのはほとんど助産婦の方々であろう。あなたが最初にとりあげる赤ん坊は、どのような人生を送るであろうか。

